

ALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan

December 2025 No.67

○AALANewsNo.67では、9月に開催された第33回AALAフォーラムの様子をお届けします。本フォーラムのテーマは「(アジア系)トランスボーダー文学とインターセクショナルリティ(交差性)——人種/ジェンダー/セクシュアリティ」と冠され、本学会の内外から多くの参加者を見ることができました。1日目のシンポジウムの講師には特別パネリストとして宇沢美子氏を含む4名のスピーカーを、2日目の特別講演にはAllan Isaac氏、舌津智之氏をお招きし刺激的な交流の時間となりました。また5名の多岐に渡る内容での個人発表もあり、充実した時間でありました。今回のフォーラム参加記を、村山瑞穂氏、齋藤志帆氏にご執筆いただきました。またそれぞれの発表内容は2025年度中に発行予定のAALA Journal No. 31にも掲載予定です。残念ながら参加の叶わなかった皆様も、こちらにてお楽しみいただければ幸いです。

○AALAのメーリングリストは2025年度より新しいものを運用しています。4月下旬に「アジア系アメリカ文学会メーリングリストへの招待状」というメールを、登録済みのアドレスに送信しております。メールを開き、「この招待を承諾」をクリックしてください。すでに承諾を済ませ「aala_ml」から配信を受け取っているみなさまは、再度承諾する必要はありません。参考画像がHPにも掲載されております。円滑なメーリングリストの運用に向けて、皆様のご協力をお願い申し上げます。

○2025年もアジア系アメリカ文学会の活動へのご尽力ありがとうございました。世界規模での不穏な様態が続く昨今ですが、引き続き文学研究の可能性を信じて歩みたいものです。来年も本学会が、様々な領域との協力・接続をとおしてさらに実り豊かな1年になりますように。

(文責：古川拓磨)

第33回 AALA フォーラム

「(アジア系) トランスボーダー文学とインターセクショナリティ (交差性) ——人種/ジェンダー/セクシュアリティ」

日時：2025 年 9 月 20 日 (土) ～21 日 (日)

会場：日本大学芸術学部・江古田キャンパス 南棟 S302 教室

◇第1日：9月20日(土)

13:15～ 受付

13:50 開会の辞 会長 山本 秀行 (神戸大学)

14:00～17:30 シンポジウム

「(アジア系) トランスボーダー文学とインターセクショナリティ (交差性) ——人種/ジェンダー/セクシュアリティ」

司会：山本 秀行

特別パネリスト：

- ・『オデュッセイア』の 21 世紀版翻案・翻訳から考える越境と交差性

宇沢 美子 (慶應義塾大学)

パネリスト：

- ・「ヘンリー・ジェイムズとホワイトネス——「白い」ニューポートが隠すもの」

松浦 恵美 (日本大学)

- ・「周縁からの星明かり——Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* における女たちの交差」

渡邊 真理香 (中京大学)

- ・「グラフィック・ノベルにおけるアジア系表象の現在——オルタナティヴなメディア文化の想像力と『DE I & B』をめぐって」

中垣 恒太郎 (専修大学)

18:00～懇親会

会場：イタリアン・レストラン パンコントマテ 江古田店

◇第2日：9月21日(日)

9:00～ 受付

※9:00～10:00 総会 (会員のみ)

10:00～12:00 特別講演 I

“‘Almost Words’: Sense, Sensibility, and the Paranoid Style in Cold War Asian American Literature”

Prof. Allan Isaac (Rutgers University, USA)

司会：牧野 理英 (日本大学)

12:00～13:00 休憩

13:00～15:00 特別講演 II

「ディズニー映画にみるインターセクショナリティの政治学」

舌津智之 氏（立教大学）

司会：古木 圭子（奈良大学）

15:00～17:50 個人発表

司会：池野 みさお（津田塾大学）

・「越境者の「空」なる自己——Cultural Identity の視点から読む *A Tale for the Time Being*」

西山 由佳（関西学院大学・院）

・「日系強制収容というトラウマからの回復（不）可能性——Kerri Sakamoto, *The Electrical Field* における他者との断絶」

小谷 真由（神戸大学・院）

司会：小坂 恵理子（法政大学）

・“Collective Narration and the Erasure of Self: Gendered Voice and Racial Invisibility in *The Buddhain the Attic*”

Kahina Aimeur (Ph.D. Student, Nihon University)

・“(Re)Constructing Race in Transborder Vistas: Intersectionality and Takezawa’s 3R in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*”

Lyle De Souza (Kyoto Notre Dame University)

司会：山本秀行

・特別ポスター発表 “Utility and Community in *A Map of Betrayal* and *Native Speaker*”

Haiyi Wang (王海颐) (PhD Researcher, Sungkyunkwan University)

17:50 閉会の辞 副会長 牧野 理英

※科研費・基盤研究 (B)：「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成と世界的研究ネットワーク構築（代表者：山本秀行、研究課題番号：23K25310）の助成を受けています。

◇講演・発表要旨

シンポジウム

・『『オデュッセイア』の 21 世紀版翻案・翻訳から考える越境と交差性」

宇沢 美子（慶應義塾大学）

本発表では、オデュッセイアの再話論と北米英の文学について考える。21 世紀のカナダ人作家アトウッドの『ペネロピヤード』、トルコ系アメリカ人作家プチャクの「トロイア戦争博物館」といった作品を最終地点として、そこに至るまでの 19 世紀、20 世紀において、人種、ジェンダー、戦争というインターセクションから、どのような再話や翻訳が生まれ、この古代ギリシアの物語が、現代の物語へと仕立て直されてきたか、を概観する。そこからアメリカ文学、ジェンダーと人種の重なり、海洋文学、コスモポリタニズム、ひいてはアジア系アメリカ文学へも繋がるトランスボーダー文学の自己越境的な翻案可能性について考えてみたい。

・「ヘンリー・ジェイムズとホワイトネス——「白い」ニューポートが隠すもの」

松浦 恵美 (日本大学)

ヘンリー・ジェイムズの旅行記『アメリカの風景』(1907)におけるロードアイランド州ニューポートの表象と人種表象について論じる。トニ・モリソンがアメリカ文学における人種問題への「沈黙と回避」を指摘するように、本テキストにおいて、18 世紀にニューポートで盛んに行われた奴隷貿易の歴史は完全に抹消されている。しかし、この街を「優美な白い手」になぞらえるジェイムズの言説を、なにかが隠蔽されていることをむしろ指し示すものとして読むこともできるのではないか。本発表では、ジェイムズの人種表象（とその不在）を、彼自身のジェンダー、セクシュアリティ、そしてナショナリティとの関係において読み解くことを試みる。

・「周縁からの星明かり——Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* における女たちの交差」

渡邊 真理香 (中京大学)

日系のトランス女性作家 Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* (2021) はヒューゴー賞長編小説部門ノミネート、アザーワイズ賞 (旧ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア賞) 受賞の SF 小説である。アジア系アメリカ文学は常に差別の交差に焦点を当て続けてきたが、*Light from Uncommon Stars* の主人公 Katrina のようなアジア系トランス女性の経験を扱ったものは少ない。本作では、宇宙人、悪魔、バイオリン、ドーナッツ、AI 等々さまざまなキーワードが溢れる中で、女性登場人物たちのつながりに注目したい。家父長的価値観や女性蔑視に苦しめられる女性たちの出会いと結びつきが、最終的には Katrina の自己肯定に結実する過程を考察することで、アジア系コミュニティ内の差異を浮かび上がらせ、十分に包摂されてこなかった人々に我々の目を向けさせる Aoki の創作スタイルについて考えたい。

・「グラフィック・ノベルにおけるアジア系表象の現在——オルタナティブなメディア文化の想像力と『DE I & B』をめぐって」

中垣 恒太郎 (専修大学)

2000 年代に「グラフィック・メモワール」と呼ばれる回想録が目立った動きを示すようになったことを契機に、それまでコミックスに馴染みのなかった読者層にまでも届く、多様な視点によるグラフィック・ノベルが活況を呈している。その中でもマイノリティとして米国の高校生活を中国系 2 世の視点から描いた Gene Luen Yang, *American Born Chinese* (2006) や、「サイゴン陥落」以後、米国に移住してきた両親の波乱に富んだ人生を娘の視点から辿るベトナム系女性作家 Thi Bui, *The Best We Could Do* (2017) など、アジア系によるグラフィック・ノベルの作品群は「DEI&I」(多様性・公平性・包括性・帰属意識) の観点について考える上で有益な視座をもたらしてくれる。アジア系の書き手が今現在どのように新たな表現手段を創り出しているのか、さらに、若い読者に対する教育的効果についても展望する。

特別講演 I

“‘Almost Words’: Sense, Sensibility, and the Paranoid Style in Cold War Asian American Literature”

Prof. Allan Isaac (Rutgers University)

In 1976, Maxine Hong Kingston’s *Woman Warrior* arguably set the tone for the institutional founding of Asian American Literature in the marketplace and in higher education. The title invokes the famous torture scene in the novel and Richard Hofstadter’s 1963 lecture on “The Paranoid Style in American Politics.” Asian American literature was borne from communal struggle and forged from the crucible of Cold War paranoia, circulating again today with turbulent new life. This paranoia as a pervasive “style” of apprehending the world, according to Hofstadter, sees the enemy everywhere to erect violent borders and to generate binaristic absolutes, whereby only the elimination of one or other force is the only conceivable end. How do the origins of our field continue to condition how we teach literature? Hofstadter asserts that “one of most valuable things about history is that it teaches us how things do not happen.” As ethnic studies is obliterated in the U.S., what can Asian American literature teach us now? What life-worlds and other-worlds could happen in the word, the work, and the world?

<A Brief Introduction to Keynote Lecturer>

Dr. Allan Punzalan Isaac is Professor of American Studies and English at Rutgers University-New Brunswick, NJ. He specializes in Asian American and comparative race studies and examines issues around migration, postcoloniality, gender and sexuality, and the Philippines and its diaspora. His first book *American Tropics: Articulating Filipino America* was the recipient of the Association for Asian American Studies Cultural Studies Book Award. His second book is entitled, *Filipino Time: Affective Worlds and Contracted Labor*. He has taught at De La Salle University-Taft in Manila, Philippines as a Senior Fulbright Scholar. His current research focuses on death and the otherworldly in Filipino diasporic visual culture.

特別講演 II

「ディズニー映画にみるインターセクショナル리티の政治学」

舌津 智之 氏 (立教大学)

ある種の古典的なディズニー映画は、今日的なインターセクショナル리티の概念を先取りしていた。たとえば『ダンボ』の主人公は、障がい者／人種的他者／性的マイノリティの象徴的な要素を合わせ持っている。本発表ではまた、『ダンボ』における「ピンクの象」の悪夢を反復する『くまのプーさん』を取り上げ、その同時代的背景としてあるベトナムの影をふまえつつ、そこに透かし出される白人性と男性性の連動的な不安を見据えたい。

<講演者略歴>

東京大学大学院修士課程修了、テキサス大学オースティン校にて博士号取得。現在、立教大学文学部教授。抒情とジェンダー、セクシュアリティの諸相に注目し、モダニズム期を中心としたアメリカ文学、及び日米の大衆音楽文化を研究。著書に『抒情するアメリカ—モダニズム文学の明滅』、共著書に『現代アメリカ—日米比較のなかで読む』『ブルースに囚われて—アメリカのルーツ音楽を探る』『ジェンダー白書 3—女性とメディア』他多数。

個人発表

- ・「越境者の「空」なる自己——Cultural Identity の視点から読む *A Tale for the Time Being*」

西山 由佳（関西学院大学・院）

本発表は、日系三世アメリカ人作家 Ruth Ozeki (1956-) の *A Tale for the Time Being* (2013) において二人の主人公が展開する自己探究の過程を、Stuart Hall による“Cultural Identity”の概念を参照しながら読み解き、その描写が作家自身の複合的な自己を象徴する仏教思想「空」を体現していることを指摘する。

Hall はアイデンティティを固定的な本質として捉える見方を問題視し、アイデンティティを決して完成することのない変化の過程として捉える“Cultural Identity”の概念を提唱した。本作品の二人の主人公——アメリカで育ちアメリカ人を自認するが故に日本への帰国後自己を見失う日本人 Nao と、「日本人の子孫」としての意識を強く持つカナダ在住の日系アメリカ人 Ruth——は、時空を越えて出会った他者との間に「差異」と「繋がり」を見出しながら、常に自己を揺らがせる。彼女たちはまさに、Hall の説く流動的なアイデンティティの体現者である。

本研究は、このような描写が日系三世作家 Ozeki 自身の自己探究を反映しており、またその末に彼女が辿り着いた仏教思想「空」——自己の不完全性が他者との縁起を生じさせるという教え——の象徴であることを指摘する。

- ・「日系強制収容というトラウマからの回復（不）可能性——Kerri Sakamoto, *The Electrical Field* における他者との断絶」

小谷 真由（神戸大学・院）

日系カナダ人三世作家 Kerri Sakamoto (1960-) の *The Electrical Field* (1998) は、1970 年代のカナダを舞台とし、ある殺人事件をきっかけに蘇る、語り手である日系カナダ人二世女性 Asako の日系強制収容の記憶を断片的に描く物語である。本作品における Asako のヒステリックな言動は、日系強制収容や、そこで自らの行動が招いた兄 Eiji の死というトラウマ的出来事に起因すると指摘される。収容所解放から 30 年が経過してもなお理解不能な過去からの影響を受け続ける Asako を描くことで、日系強制収容の問題を過去の出来事として完結させないことに成功していると評価されてきた。本発表では、なぜ Asako のトラウマ的記憶が作中の登場人物に対して語られず、Asako の症状が回復に至らなかったのかについて検討する。特に、彼女が引き受けざるを得なかったケアの営みに注目し、自身の心の傷がケアされることなく、一方で自らは家庭内外で他者へのケアを強いられるという、彼女の置かれた人種的・性的抑圧構造を分析する。また、彼女の記憶の語りを促す、殺人事件によって恋人を失った少女 Sachi との交流をとおして、Asako の個人的に抱えるトラウマ的記憶がいかに語られ、語られないのかを考察する。そのうえで、強制収容を経験していない三世作家がその集合的・個人的記憶を物語化することによる、記憶の継承の可能性を明らかにする。

- “Collective Narration and the Erasure of Self: Gendered Voice and Racial Invisibility in *The Buddha in the Attic*”

Kahina Aimeur (Graduate Student, Nihon University)

The presentation explores how Julie Otsuka’s *The Buddha in the Attic* uses collective narration to depict the erasure of individual identity among Japanese picture brides in early 20th-century America. Told in the first-person plural “we,” the novel reflects the women’s collective struggle with racial invisibility, gendered oppression, and social marginalization. The use of collective narration emphasizes how these women are perceived not as distinct individuals, but as a homogenous group defined by their race, gender, and immigrant status. The novel illustrates how different forms of oppression—such as labor exploitation, forced assimilation, and wartime xenophobia—render these women voiceless in the dominant historical narrative. However, Otsuka’s collective narration is both a representation of erasure and a subtle form of resistance. By giving voice to the collective “we,” the novel restores visibility to women who were long excluded from American history, transforming silence into testimony and absence into presence.

- “(Re)Constructing Race in Transborder Vistas: Intersectionality and Takezawa’s 3R in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*”

Lyle De Souza (Kyoto Notre Dame University)

This paper analyses Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go* as a transborder narrative, employing a modification of Yasuko Takezawa’s “3R” framework—Representation, Resistance, and Reconfiguration—alongside intersectionality to explore the manufactured identity and systemic dehumanisation of the clones.

“Representation,” encompassing Takezawa’s concepts of ‘race’ (small ‘r’) and ‘Race’ (capital ‘R’), reveals how the clones are constructed as a biologically distinct and inferior “other” through genetic engineering and a scientifically rationalised system of exploitation, a process mirroring historical racialisation. “Resistance,” or ‘Race as Resistance’ (RR), is observed in the clones’ subtle yet profound assertions of humanity: their artistic endeavours, complex emotional lives, interpersonal bonds, and their poignant search for meaning and deferrals from their predetermined fate as organ donors. Finally, the narrative achieves “Reconfiguration” by compelling a re-evaluation of humanity itself, challenging bio-genetic definitions through its focus on the clones’ capacity for love and empathy, thereby suggesting alternative models of kinship that move beyond biological assumptions.

The intersecting axes of their manufactured “race,” gendered societal roles (particularly for female “carers”), and liminal (post)human status illuminate unique modes of oppression. *Never Let Me Go* thus serves as a powerful allegory for marginalised experiences within diasporic and transborder contexts, dissecting the insidious and pervasive nature of othering.

<特別ポスター発表>

- “Utility and Community in *A Map of Betrayal* and *Native Speaker*”

Haiyi Wang (王海颐) (PhD Researcher, Sungkyunkwan University)

This paper compares Ha Jin’s *A Map of Betrayal* and Chang-rae Lee’s *Native Speaker* to show how Asian American immigrant men negotiate collisions between personal loyalty and political “utility.” Framing the protagonists’ choices through a consequentialist lens, I argue that a pursuit of outcomes that appear to maximize benefit for self and community often founders within racialized institutions that script the “model minority” as both useful and suspect.

In *A Map of Betrayal*, Gary Shang’s double fidelity to China and the United States dramatizes utilitarian reasoning under Cold War surveillance. A split form—third-person espionage chronicle braided with his daughter Lillian’s first-person search—stages competing moral claims while revealing how justifications of “benefit to both countries” unravel into alienation. The novel’s structure and commentary expose the costs of attempting to serve transpacific communication and personal advancement at once.

Native Speaker situates Henry Park (and fellow Korean American men) in an exclusionary 1970s political order where mainstream xenophobia renders non-mainstream identities intrinsically threatening.

Their efforts to convert ethnic capital into political and economic utility remain precarious and ad hoc; even participation in surveillance regimes (e.g., monitoring John Kwang) cannot secure belonging, and “usefulness” becomes a mechanism of discipline.

Across both novels, I trace how double consciousness and dual fidelity shape masculine subjectivity and public action, linking intimate life to state projects. The analysis clarifies why measuring immigrant worth by “utility” is politically misleading: the protagonists’ ad hoc position within white American mainstreams cannot reconcile communal welfare with individual ethics as classical utilitarianism presumes. The conclusion distinguishes outcomes-focused reasoning from ethical ground, showing how consequentialist calculus—without robust normative commitments—licenses betrayal, surveillance, and exclusion. By reading espionage, campaigning, and community mediation together, the paper connects transpacific histories to U.S. democracy and exposes the limits of “model minority” utility as a path to inclusion.

<フォーラム参加記>

①

2025年9月20,21日、昨年に続き全面対面での開催となった第33回AALAフォーラムに参加した。私は第3回からほぼ欠かさず参加してきたが、少人数の有志が集う合宿勉強会のようであったAALAフォーラムが、今や海外からの発表者を迎え、充実したプログラムを誇る国際学会へと変貌を遂げたことに感慨を覚える。残念ながら今回は全てのプログラムへの参加がかなわず、フォーラムのテーマを冠するシンポジウムを中心に参加記を書かせていただく。

振り返ってみるとAALAフォーラムのテーマにも変遷があり、ここ数年の傾向として、「アジア系アメリカ文学」というジャンル名がそのままの形ではテーマに入らなくなっている。背景には、アジア系アメリカ文学がアメリカ文学のサブジャンルとして確立する一方、グローバル化が進む中、このカテゴリーが窮屈に感じられ、隣接する文学・文化ジャンルを取り込み、議論の枠を広げる必要に迫られていることがあるだろう。また近年、文学研究自体が斜陽に向かい、狭いジャンルに閉じている研究コミュニティの存続さえ危ぶまれる状況になりつつある。今回のシンポジウム「(アジア系) トランスボーダー文学とインターセクショナリティ (交差性) ——人種/ジェンダー/セクシュアリティ」には、本学会員の有無を問わず多くの方々が参加し、会場は満席となった。

冒頭、研究発表に先立ち、司会の山本秀行会長より、最近注目を浴びている「インターセクショナリティ (Intersectionality)」という用語について、主要文献からの引用を交えた丁寧な解説が行われた。

これを受けて、まず、特別パネリストの宇沢美子氏が、北米英文学における古代ギリシアの長編叙事詩 *The Odyssey* の翻案・翻訳について話された。T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922)、Ralf Ellison の *Invisible Man* (1952) から、Margaret Atwood の *The Penelopiad* (2005)、Madeline Miller の *The Song of Achilles* (2012) まで、叙事詩が、時空をめぐり、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、国家、戦争が交差する新たなテキストとして語り直されてきた軌跡を示された。ことに Amy Wilson による *The Odyssey* の翻訳(2015)と *The Penelopiad* のジェンダー視点からの分析は圧巻であった。発表要旨にあるトルコ系アメリカ人作家の作品への言及がなかったのは残念だが、最終的に Wai Chee Dimock の“low epic”へと繋げるスケールの大きな先端的議論に感銘を受けた。

次に松浦恵美氏が、欧米を跨ぎ、元祖ボーダーレス文学ともいえる作品を残した Henry James の旅行記 *The American Scene* (1907) を取り上げられた。ロードアイランド州の港町ニューポートの描写において、ホワイイトネスが強調されるテキストから奴隷貿易の拠点であった町の歴史が完全に消し去られているが、その完璧さゆえに背後に隠されたものが際立つと論じた。ただ、最初に提示された Toni Morrison の *Playing in the Dark* (1992) からの引用は、「アメリカ文学にお

ける人種問題への『沈黙と回避』を指摘する」(発表要旨)ものではなく、アメリカ文学批評において、白人作家の描く黒人、黒人性についての議論が「沈黙と回避」に支配されてきたことを指摘し、その一例として James の *What Maisie Knew* を挙げているのである。Morrison の引用を議論の土台とするなら、それに対する James 研究者としての応答をお聴きしたかった。

三番目のパネリスト渡邊真理香氏は、日系トランスジェンダー女性作家 Ryka Aoki の SF 小説 *Light from Uncommon Stars*(2021)を論じた。物語の主人公、ベトナム人、中国人、メキシコ人の混血で、移民の両親から生まれたトランスジェンダーの少女 Katrina Nguyen は、まさにシンボジウムのサブタイトル「人種、ジェンダー、セクシュアリティの交差」を体現している。発表ではアジア系トランス女性が抱える深刻な問題が、参考文献や本小説からの引用を使って分析された。登場人物についての説明はレジメにも挙がっていたが、LA のアジア系コミュニティを背景に、バイオリンと音楽(クラシックとゲーム音楽)、食文化、ファッション、ネット配信、SF 映画などを交え、宇宙規模で女性たちの絆を描くポップな物語世界を、その筋立てとともに浮かび上がらせると、作品論としてより面白くなったのではないだろうか。

締めは、中垣恒太郎氏がグラフィック・ノベルのアジア系表象について発表された。日本語訳も出ている Gene Luen Yang, *American Born Chinese*(2006)や Thi Bui, *The Best We Could Do* (2017)を始め、2000 年代に出版が相次ぐアジア系グラフィック・ノベルの数々を、表紙のスライドを提示しながら紹介された。それらが人種、ジェンダー、階級、世代、国家等の交差性を孕むことは明らかなが、ここではそれらが『DEI&B』(多様性・公平性・包括性・帰属意識)を考える視座(発表レジメ)を与える教育的効果を持つ点が強調された。従来の文字の本とは異なるオルタナティブなメディア文化としてのグラフィック・ノベルの隆盛を、丹念なリサーチに基づいて分析する実に教育的(informative)な発表だった。

これらの発表の後、質疑応答が行われた。その際、私は、1989 年にアメリカ黒人女性法学者 Kimberle Crenshaw が編み出した「インターセクショナルリティナリティ」という用語が、昨今なぜ再び脚光を浴びているのかと問い、物議をかもしてしまった。考えてみると、多文化主義が称揚された 1990 年代以降、人種、ジェンダー、階級、セクシュアリティ、国籍、障害等の交差を意識することは当然とされ、「DEI&B」も推進されてきたわけだが、一方でその動きに対して不遇感を託つ白人男性労働者階級からの反発があり、その勢力が 2017 年に第一次トランプ政権を生み出す一因ともなり、2025 年からの第二次政権では、あからさまに「DEI&B」が否定される状況が生まれている。「インターセクショナルリティ」という「概念=分析枠組み」の再浮上は、トランプのアメリカへのリベラル側からの巻き返しを示唆しているのではないか。その意味で、今回のテーマのサブタイトルはあまりに限定的だと思える。もちろん、実際の研究発表はそれに限定されるものではなかったことは幸いである。

(村山瑞穂 愛知県立大学名誉教授)

②

昨年 2024 年に神戸大学で開催された AALA35 周年記念国際フォーラムに続き、今年も、日本大学芸術学部・江古田キャンパスにて開催された第 33 回 AALA フォーラムに 2025 年 9 月 20 日、21 日と両日参加した。会員としては初めての本格的な参加にもかかわらず、AALA 会長の山本秀行先生をはじめ、運営メンバーの先生方、パネリストの先生方や大学院生の方々にあたたかく迎えていただいた。

今年度のフォーラムのテーマは「アジア系トランスボーダー文学とインターセクショナルリティ」である。法学者であるキンバリー・クレンショウが「言語化」し、広めた「インターセクショナルリティ」という概念/分析枠組みは、交差性を鍵とし、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、世代、アビリティなどのカテゴリーが相互に関係し、抑圧や差別の軸が組み合わされることによって、人びとの経験を形づくっていることが山本先生から紹介された。アジア系アメリカ文学研究に取り組んできた私たちにとってその概念は決して新しいものでは

ないが、法学者がターム化し、広く認識されつつあるこの分析枠組みをあえて意識し直し、取り組んできたテキストをあらためて読み直してみることで、見えてくるものがあるかもしれない。そのような予感を持ち、そしてその実感を得た2日間だった。

20日、1日目には4名のパネリストが登壇された。宇沢美子先生からはホメロスによる『オデュッセイア』を「元祖トランスボーダー文学」として読み直す試みと、それを可能にする翻訳群が提示された。21世紀のフェミニスト re-writing が浮き彫りにするのは、従来の翻訳が行ってきた打ち消しであること、しかし同時に時代を超えて読み継がれる古典は「構築と破壊」の繰り返し、再話、語り直しをじゅうぶんに可能にするものであることを感じた。

松浦恵美先生はヘンリー・ジェイムズの作品における「白さ」、白いもの、が人種とセクシュアリティを隠すものであることを提起された。南北戦争に参加できなかったことが、男性性、また国民として未満であるとみなすジェイムズの「白人」アメリカ兵への憧れが、彼の人種についての問題意識と、クリアな面を覆い隠していったという指摘は、国民になるために従軍することに関心を寄せる者にとって示唆に富むものであった。

渡邊真理香先生は有色人種でトランス女性の交差的な抑圧が、SF、ファンタジーという文学ジャンルを通して綴られる有効性を論じられた。既存の偏見や先入観を壊すSF、ファンタジーは、同時に厳格な二元論を打ち破る力を持つ。その「破壊的」試みが疎外されてきた主体を語るために効果的であるという視点を得た。

中垣恒太郎先生はゼロ年代には専ら白人男子のカルチャーとして流通し受容されてきたグラフィック・ノベルについて、周縁に位置づけられてきた主体も主人公として描かれるようになり、自分たちの物語を描く機会を与える可能性を有するメディアとして提示された。従来自伝文学が果たしてきた役割が、文字による表現に限定されず、より広範なリーチを可能にする連帯の形として、グラフィック・ノベルにおいて示されていることを知ることができた。

2日目の21日は、特別講演にAllan Isaac先生、舌津智之先生が登壇された。Isaac先生は冷戦下における、善悪二元論的な世界認識が文学作品にどのように表れているかについて、それが鮮明に表れているMaxine Hong Kingstonの*The Woman Warrior*を例に説明された。アジア系アメリカ文学に充ちる「パラノイア」というテーマは、明確な言葉になる前段階の、口から漏れ出る音(sobs, chokes)にも耳を傾け、その苦しみと痛みをまなざしている。その切り口からは、多くの学びが与えられた。

舌津先生は「ダンボ」をはじめとするディズニーアニメーション映画のなかにアフリカ系アメリカ人表象、同性愛表象、あるいは資本主義と社会主義のせめぎ合いといった仄めかしが至る所に隠されていることが示された。視覚的情報としてのシンボルに気づけないでいること、それは、自らがそれに気づかない/気づけないでいることができる特権性を有しているからではないか、と自問する機会を得た。

また、個人発表では5名の発表者がそれぞれ発表され、活発な発表と議論がおこなわれた。なかでもLyle De Souza先生は、イギリスのディストピア小説、Kazuo Ishiguroによる*Never Let Me Go*を通して、欧米中心・現代中心・白黒二元論的枠組みだけでなく、竹沢泰子による3R(小文字のrace、大文字のRace、Race as ResistanceのRR)の枠組みも援用しながら、人々はどのように他者を人種化し(され)、非人間化し(され)ているか、そのことをSF・ディストピア小説というジャンルを用いて表現していることを説明された。複数の境界に身体を置いてきたIshiguroが他者化される人々の感情というテーマをディストピア小説という形をとって表現したこと、そしてそれがどのような構造的差別のアレゴリーを語りに含んでいるか、Lyle De Souza先生の発表によって可視化された。

本フォーラムで紹介されたさまざまな対象——周縁に位置づけられるとみなされてきたアジア系アメリカ文学やトランスボーダー文学、そして一見「主流の」ナラティブを代表しているかに思えるグラフィック・ノベルやディズニー映画——にみる「交差性」はさまざまな視点を私たちに提供している。海や国境を越えた両親、または祖父母の言葉の記録、先祖となる人々の

集団的な記憶、あるいは大きな記憶に接続する、個人的な、個々の物語としての自伝、そしてときにはファンタジーや SF の形をとって伝えられるフィクションと、その背後に横たわる歴史の断片は、トラウマ的記憶と痛みを伴いながらも、彼・彼女たちがどのように生き延びてきたかを示す足跡でもある。

これらの作品から得られるオルタナティブな視点は、いったんは世界を強く二元論的に捉える認識を浮かび上がらせると同時に、そうした認識そのものを問いなおす契機ともなる。この問いなおしのプロセスは、トラウマを抱え、沈黙や問題からの回避という応答を選び取ってきた主体が、これまで他者によって語られてきた物語を自らの手元に取り戻し、語りなおすための後押しとなる。さらに、その語りなおしは、ひとつの理想化された物語へと回収されてしまうことへの抵抗でもあり、その語りに触れた別の主体をも、新たな語りへと促していく。こうした連鎖的な想起が、全発表を通して幾度も呼び起こされた。多様な現実が存在していることを可視化することが境界に立つ人々の語りの持つ力であり、本年のフォーラムだけでなく AALA では何年にも渡ってこれらのテーマが議論され、検討され、問題提起されてきたことが、質疑応答でもなされた、なぜ、いま、「インターセクショナリティ」というタームをあえて用いて再検討するのか、という問いにもあらわれていたように感じた。

現在、第二次世界大戦下の収容所で編まれた文芸作品を特に女性の語りに着目して分析を進めている。アジア系で、移民、あるいはその子孫であり、女性で、日本語を主たる言語とする者、または日本語で表現することを選んだ人々の文芸作品はさまざまな交差性を内包している。本フォーラムで得た出会いと学びを大切にしながら、私も AALA フォーラムで発表できるよう研鑽を積んでいきたい。

齋藤志帆（東北大学・院）

2025 年度 AALA 総会議事録

議題：

1. 報告事項

(1) 2024 年度 (2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日) 活動報告

①例会

5 月例会 (第 153 回)	5 月 25 日 (土)	オンライン
7 月例会 (第 154 回)	7 月 27 日 (土)	オンライン
11 月例会 (第 155 回)	11 月 9 日 (土)	オンライン
1 月例会 (第 156 回)	1 月 25 日 (土)	オンライン
3 月例会 (第 157 回)	3 月 9 日 (日)	オンライン

研究発表者および発表要旨は AALA News No.66 に掲載済み

②第 32 回フォーラム (AALA 35th Anniversary International Forum)

9 月 21 日 (土)、22 日 (日) に神戸大学で開催

プログラムや発表要旨は AALA News No.65 に掲載済み

③AALA Journal

2024 年 12 月 31 日付けで AALA Journal/No.30 を発行

AALA 35th Anniversary International Forum を特集した

(2) 2024 年度会計報告

2. 審議事項 すべて承認

(1) 2025 年度 (2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日) 予算案

(2) 2025～2026 年度役員・役割分担の変更、会則の改訂案

<役員>

特別顧問：植木照代

顧問：桒原美恵、小林富久子

(以下、地区ごとに 50 音順)

東京地区：麻生享志、池野みさお、原恵理子、牧野理英

中部地区：寺澤由紀子、村山瑞穂、渡邊真理香

関西地区：莊中孝之、野崎京子、深井美智子、藤井爽、古川拓磨、古木圭子、松本ユキ、山本秀行

中四国地区：風早由佳

(計 19 名)

<役割分担>

会長：山本秀行

副会長：古木圭子、牧野理英

事務局：渡邊真理香 (事務局長：業務全般、ホームページ管理運営)、松本ユキ (事務局

長補佐：国内外広報)、藤井爽 (会計、名簿)、古川拓磨 (会計補佐)

例会企画委員：山本、古木、牧野、渡邊、松本、村山、風早

(3) 2025 年度後半～2026 年度前半の活動予定

①フォーラム：2026 年 9 月 26 日（土）～27 日（日）於 神戸大学

テーマ「アジア系トランスボーダー文学とポストヒューマニズム」(仮題)

②例会：2025 年 11 月 8 日（土）Dan Kwong 来日予定に合わせてハイブリッド開催

2026 年 1 月 未定

2026 年 3 月 未定

2026 年 5 月 未定

2026 年 7 月 未定

③AALA Journal No. 31 担当：牧野理英、山本秀行、古木圭子、麻生享志、Nathaniel Preston

2026 年 3 月頃発行予定

④AALA News No. 67 担当：古川拓磨_2025 年 12 月下旬発行予定

⑤AALA News No. 68 担当：藤井爽 2026 年 6 月下旬発行予定

2025 年度の例会要旨と第 34 回 AALA フォーラムの予告

(4) シニア会員制度の導入（「アジア系アメリカ文学会会則」の一部改訂）

「会員歴が 20 年以上で年齢 70 才以上」の会員に「シニア会員資格」を与える。

シニア会員は満 70 才になる年度以降に自己申告をする。

年会費は学生会員と同じ 3,000 円とする。

(5) その他

①シニア（特別）フェローの設定（2026 年度以降の総会で審議予定）

②新メーリングリストの運用について

4 月下旬に「アジア系アメリカ文学会メーリングリストへの招待状」を送ったが、まだ 6 割の会員が未承諾（旧メーリングリストを未だ併用中）。早急に招待メールの確認・承諾をお願いしたい。

事務局だより

<新入会員の紹介> (敬称略、順不同)

Kahina Aimeur (日本大学[院])、丸山萌菜美 (日本大学[院]修了)、西山由佳 (関西学院大学[院])、児玉恵太 (椙山女学園大学)

<会費納入のお願い>

いつも会員の皆様には、会費を納入いただきましてありがとうございます。*AALA Journal* No.30 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

<住所等変更について>

住所、所属、メールアドレス等に変更あるいは、事務局に連絡事項がございましたら、会費振り込み票に記入されるだけでなく、ご面倒ですが、事務局までメールでお知らせいただきますようお願い申し上げます。

AALA 事務局メールアドレス : aala.jp.office@gmail.com

<*AALA Journal* バックナンバー購入のお願い>

AALA Journal バックナンバー (在庫僅少の No.1 を除く) を 1 部 1,000 円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

<ジャーナルの執筆者負担>

ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額に応じてバックナンバーをお送りしています。「文献解題」や「書評」については「論文」の半額、学生会員については、各区分の規定額の半額となります。研究費・校費等で支払いを希望される場合は事務局にご相談ください。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです (振込料金は振込者負担となります)。

[郵便振替口座番号 01180-1-75183 加入者名 アジア系アメリカ文学会]

アジア系アメリカ文学会
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内
TEL&FAX: 078-803-5543

AALA NEWS No.67 2025 年 12 月 24 日 編集担当: 古川拓磨